

町史

とっておきの話

264

福島県中世史研究会

柳内 壽彦

同時代史料が語る只見の歴史③

『塔寺八幡宮長帳』と山内氏 — 山内氏の初見史料 —

『塔寺八幡宮長帳』とは

会津坂下町塔寺の心清水八幡神社に伝わる年日記で、現存するのは貞和六年（一三五〇年）から寛永十二年（一六三五年）までの二八六年間にわたります。総紙数一九七枚、全長約一二〇mもあるので長帳と呼ばれています。この年日記の裏書には、会津やその周辺の年々の出来事を記しており、南北朝期から江戸初期にかけての同時代史料です。

『塔寺八幡宮長帳』享徳二年（二四五三年）条

— 山内氏の初見史料 —

山内氏の初見史料は、『塔寺八幡



▲「こはやしの城」（現小林館）跡



▲明和橋から「こはやしの城」跡をのぞむ（↓が城跡）

宮長帳』裏書の享徳二年（一四五三年）八月二十八日の記事です。この記事は文章に欠損がありますが、その部分を抽出しますと、「同廿八日□あうちいりこはやしの城をとされ候、山内のいちそくみなを「しなひ」。」「ける間それをはしめてやかて」です。前後の史料を含めて享徳二年条の内容を追ってみると、享徳二年三月十六日、南北朝期から江戸初期にかけての同時代史料です。

「落ち延びました。八月十二日に」と典拠は日光山をでて伊南の河原田氏を頼り、二十八日に「こはやしの城（小林城）」（只見町）を落としました。「山内のいちそく（一族）」に続くところに欠損があるため、山内の一族以下の文章の意味は難解です。九月十七日に浜崎館（湯川村）に入りましたが、白川氏・小峯氏が浜崎館を攻めたため、二十五日に典拠は自害しました。典拠が誰かは特定できていませんが、かなりの実力をもった人物とみられています。享徳二年の内乱は蘆名氏の跡継ぎをめぐる蘆名盛詮と典拠の争いと考えられています。

史料からは室町時代の一五世紀中頃に山内氏が実在したというところしかわからないのです。

『塔寺八幡宮長帳』長禄三年（二四五九年）条

— 山内越中 —

享徳二年から六年後の長禄三年（二四五九年）、『塔寺八幡宮長帳』裏書の長禄三年条の八月二十四日、十二月十日・十二日などに山内越

中なる人物に関する記事があります。山内越中については、その名字から大沼郡の横田の山内氏一族と思われる。十二月十日・十一日については、「同年山内越中殿、御屋形さまの御意にちかわれ候て、十二月十日二越中在所へよせられ候、我所をはとられ、中野城へいられ候、御屋形さま御具足をめし、法花堂二御陣をめされ、総勢城を三系にまき候、あくる十一日二要害をち候て、越中殿父子三人生害被致候」と記述されています。記事の内容は、長禄三年山内越中は御屋形様（蘆名盛詮）の御意に違ったため、十二月十日に在所を攻められて中野城（会津若松市）に入りました。盛詮は自ら具足をつけて法花堂に陣を張り城を三重に取り囲んだので、翌十一日に城が落ち越中親子三人が自害しましたという事です。

山内越中は黒川（会津若松市）に住み、蘆名盛詮の従属下にあっただと思われま。

山内氏と伊北郷

中世の伊北郷（現在の只見町）は、



▲『図書』より小林城跡

山内氏により支配されていたとされてきました。このもとなつたのは江戸時代の文化五年（一八〇八年）に編さんされた『新編会津風土記』の大沼郡大塩組横田村の項の記述などです。そこには山内氏は経俊が文治五年（一一八九年）奥州合戦の軍功により源頼朝から会津郡伊北郷と大沼郡金山谷の地を賜り、子孫は大沼郡横田を本拠としたと書かれています。しかし、これを裏付ける鎌倉時代の同時代史料はなく、山内氏は室町時代の同時代史料である『塔寺八幡宮長帳』からも断片的なことしかわかりません。山内氏については不明なことが多いのです。